

マリーオ・マルトーネ演出、ウィル・クラッチフィールド指揮ロッシーニ交響楽団、ボロニャ歌劇場合唱団 マイケル・スパイヤーズ (T/アウレリアーノ)、ジェシカ・プラット (S/ゼノーピア)、レーナ・ベルキナ (Ms/アルサーチェ) 他
 収録：2014年8月ペーザロ Arthaus Musik 109073 [DVD2 枚組] / 109074 [BD] 日本語字幕付き



現地で観劇した感想は協会 HP に「ロッシーニ音楽祭レポート (3)」をアップ済みなので繰り返しません。実演と映像ではその印象は異なります。実演の第1幕前半は舞台が暗くて細部が見えにくかったのに対し、映像はアップを多用して歌手の表情もよく判ります。アルサーチェ役のレーナ・ベルキナについては「まだ声が熟しておらず、若過ぎます。ROF 初登場でこの役は荷が重すぎます」と書きましたが、録音ではずっと良く聴こえ、見た目の印象も異なります。ロッシーニ・ファンは見て損のない上演映像…ちなみに筆者は海外から取り寄せ、価格はDVDが約4500円でした。

協会 HP の「ロッシーニ音楽祭レポート (3)」はこちら→ <http://societarossiniana.jp/2014.8.ROF.pdf>

▼7月に撮影したロッシーニの肖像と胸像▼

ヨーロッパに行くと、各地でロッシーニの肖像画や胸像を目にします。有名な肖像画はロッシーニ本に掲載されていますが、現地で本物を見るのも楽しみの一つ。ここでは7月に筆者が撮影した写真を5点紹介しておきましょう。最初はスカラ座博物館。有名な油彩のロッシーニの肖像画…若き日と晩年のそれ…と、ブロンズの大きな胸像があります。肖像画はどちらも壁の上の方にあるので見上げる形になりますが、胸像は並んで写真を撮ることもできます (フラッシュ無しなら撮影OK。筆者の映り込んだ写真で位置や大きさが判ります)。

ミラーノのヴェルディ「憩いの家」はホール上方の壁、チューリヒ歌劇場は天井斜め下の画…最上階の客席に行くときよく見えます…にロッシーニが描かれています。



筆者撮影の写真 (スカラ座博物館 3 枚)

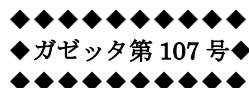
ヴェルディ「憩いの家」

チューリヒ歌劇場の天井斜め下のロッシーニの肖像



本日はこれにて失礼いたします。

(2015年7月25日 水谷彰良)



ガゼッタ第107号をお届けします。

本号は、「ROF 直前情報：アッパードが怪我で降板&フォルヴィル伯爵夫人役で長町香里さん出演!」、「スターバト・マーテルとは何か」に書いたこと、書かなかったこと、「新譜：パオロ・ボルドーニャ/トゥット・ブッフオ発売!」、「魔笛」の自筆楽譜を欲しがったロッシーニ (連載：人間ロッシーニ、第5回)」をお届けします。

次回例会9月26日 (土曜日。講師：朝岡聡) の告知はこちら→ <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

なお、今年のROF演目《泥棒かささぎ》作品解説の増補改訂版を協会 HP の「オペラの作品解説」の頁に掲載しました (7月31日アップ)。「オペラの作品解説」の頁はこちら→ <http://societarossiniana.jp/archive.opera.html>

▼ROF 直前情報：アッパードが怪我で降板&フォルヴィル伯爵夫人役で長町香里さん出演！▼

ROF の開幕に先立ち、重要なニュースが二つ飛び込んできました。

- (1) 指揮者ロベルト・アッパードがアキレス腱断裂の怪我で緊急手術を受けることになり、「グローリア・ミサ」の演奏会の指揮がドナート・レンツェッティに変更されました（7月30日 ROF サイトで発表）。
- (2) 若者公演《ランスへの旅》の2日目（8月17日）のフォルヴィル伯爵夫人に長町香里さんが出演します。これは井内美香さんからいただいた情報で、長町さんは先日の大阪国際フェスティバルでフォルヴィル伯爵夫人役のカバー歌手を務め、ペーザロのアカデミア・ロッシニアーナのオーディションに合格しての抜擢だそうです。

アッパードに関する ROF 発表はこちら↓

<http://www.rossinioperafestival.it/?IDC=506&ID=663> (イタリア語)

<http://www.rossinioperafestival.it/?lang=eng&IDC=506&ID=663> (英語)

▼“スターバト・マーテルとは何か”に書いたこと、書かなかったこと▼

現在発売中の音楽雑誌『モーストリー・クラシック』9月号の特集「マタイ受難曲と宗教音楽の魅力」に「《スターバト・マーテル》とは何か」と題した文章を求められ、機会があったらふれたいと思っていたことを書きました。それが、《スターバト・マーテル》は「痛ましい出来事に遭遇した人々の感情が織りなすドラマであり、その先に十字架から降ろされたイエスのなきがらを抱くマリア、すなわち「ピエタ」のイメージも派生する。神の子の受難以上に独りの母の哀傷に視線が注がれるがゆえに、この主題は時を超えて人々の心を深く揺さぶり続けるのである」という一文で、図版にジョットの描いたキリスト磔刑図も掲げてもらいました (p.29)。

続く「4つの名作」(pp.30-31)には、あえて書かなかったことがあります。ドヴォルザーク《スターバト・マーテル》第1曲の音楽のツボにロッシニ《スターバト・マーテル》の素材がある、という話がそれです（繰り返し現れる半音階の下向音型を指します）。それを書かなかったのは、「ロッシニ・ファンだからそう感じる」と思われたくないから。順次半音階で下降する音型で悲嘆を表すのは古くからある手法ですから、ドヴォルザークがロッシニ作品を知らなくてもこれを使ったでしょう。

真似でもコピーでもない…そう理解しつつ筆者はなお、ドヴォルザークはロッシニに触発され、その着想をもっといい音楽に高めたのだと思っています。音楽にかぎらず、他者の作品に触発されてその核となるものを自分の「掴み」とするのは良くあること。この機会にドヴォルザーク《スターバト・マーテル》第1曲をあらためてお聴きください。皆さんどう感じますか？



▼新譜：パオロ・ボルドーニャ／トゥット・ブッフオ発売！▼

『レコード芸術』の海外盤試聴記に紹介しながらメルマガに書き忘れた新譜です。

◎Paolo Bordogna / Tutto buffo (パオロ・ボルドーニャ：トゥット・ブッフオ)

《秘密の結婚》《ドン・ジョヴァンニ》《セビーリヤの理髪師》《イタリアのトルコ人》《ラ・チェネレントラ》《劇場の都合不都合》《愛の妙薬》《ドン・パスクワレ》《ファルスタッフ》《ジャンニ・スキッキ》《レ・マスケレ》《フィレンツェの麦わら帽子》より滑稽役のアリア。全14曲

パオロ・ボルドーニャ (B-Br) フランチェスコ・ランツィットロッタ指揮フィラルモーニカ・アルトゥーロ・トスカニーニ 録音：2014年9月パルマ Decca 4811685[CD]



ロッシニやドニゼッティのオペラを好きな人は、パオロ・ボルドーニャをご存じのはず。ブルーノ・プラテニコに続いて現れたブッフオ専門のバス=バリトンで、ROFにも毎年のように出演しています。ペーザロ通いの筆者は何度もオペラや演奏会で聴き、キャラクターを評価しながらも声楽的には満足しない、というのが正直な感想です。滑稽役者としての才能は充分あるのですが…

チマローザからロータに至る古今のブッフオ役…ロッシニ 3 役 (バルトロ、ジェロニオ、マニーフィコ) とドニゼッティ 3 役 (マンマ・アーガタ、ドゥルカマーラ、ドン・パスクワレ) 含む…のアリアを収めたこのアルバムは、そんなボルドーニャのショーケースと言うべきもの。個人的にはマスカーニ《レ・マスケレ》やロータ《フィレンツェの麦わら帽子》のように楽曲を取り出して聴く機会の少ない曲を楽しみました。いろんな意味でマニアックな人にお薦めの CD です。

▼《魔笛》の自筆楽譜を欲しがったロッシニ (連載：人間ロッシニ、第5回) ▼

ロッシニのモーツァルトに対する敬愛が若き日に芽生えたことは、「学生時代に《魔笛》の序曲と同じようなシンフォニアを作曲しようとしたけれど、うまくいかなかった」と後に述べたことでも判ります。尊敬の念は歳を重ねるごとに深まり、「あなたが作曲したオペラの中でどれが一番傑作だと思いますか」と質問されたロッシニ

ニが、「ドン・ジョヴァンニ！」と即答した逸話も残されています。

1858年秋、ショセ・ダントン通り的高级アパルタメントに移り住んだロッシーニは、壁に掛けるモーツァルトの肖像画をフランクフルトの音楽出版社ヨーハン・アンドレに注文し、届いたそれを掲げてご満悦でした。当時のアンドレ社の社主はヨーハン・オギュスト・アンドレ (1817-87) ですが、先代の父ヨーハン・アントーン・アンドレ (1775-1842) はモーツァルトの妻だったコンスタンツェから《フィガロの結婚》と《魔笛》を含む270にのぼるモーツァルトの自筆楽譜を買い取り、その初版楽譜を順次出版したことで知られます。

それを知るロッシーニは、モーツァルトの肖像画の礼状への追伸に、「《魔笛》の自筆楽譜を所有されておられるなら、どのような条件でお譲りいただけますでしょうか？」と尋ねています。文面は妻オランプの代筆ですが、幾ら払ってもいいから売ってほしい、とのニュアンスが感じ取れます。

残念ながらロッシーニは《魔笛》の自筆楽譜を入手できませんでした。でもそれを買ってどうするつもりだったのでしょうか。もちろん尊敬するモーツァルトの自筆をこの目で見て、手元に置きたかったのでしょうか…とはいえ悪戯が大好きなロッシーニですから、《魔笛》の自筆楽譜に「これは私の自筆譜 G.Rossini」と署名したかもしれません。

ロッシーニは折にふれモーツァルトへの尊敬を公言しましたが、亡くなる1年前の1867年には自宅を訪れた作曲家ナウマンに対し、こう述べています——「私にはたった一つ、どうしても理解できないことがある。かつてモーツァルトを生んだ民族が、どうしてヴァーグナーのために彼 [モーツァルト] を忘れることができるのでしょうか！」。

ロッシーニのヴァーグナーに対する関心や評価はなかなか興味深いのですが、その話は後日この連載に記させていただきます。

本日は、これにて失礼いたします。筆者は8月12日に日本を発ってペーザロ入りし、13日からROF 三昧の日々に突入します。とはいえ宴会の日々でもありますので、ROFの感想を15日配信「ガゼッタ」に載せるのはどう考えても無理。次号(第108号)はあらかじめ日を決めずに配信する、というアバウトな設定でお許しください。

では、楽しい夏休みをお過ごしください。ペーザロを訪れる会員も多いですね。現地でご一緒できるのを楽しみにしています。

(2015年8月5日 水谷彰良)



ゼッタ第108号をお届けします。

急いでお知らせしないといけない告知があり、15日の配信ではなく前倒しで10日に配信させていただきます。本号は、「8月12日、ロッシーニと食べ物に関する本の出版記念会がペーザロで開催!」、「8月16日、東京ユヴェントス・フィルハーモニーの演奏会に会員割引実施!」、「アッカデーミア・ロッシニアーナでフローレスが熱血指導!」をお届けします。

次回例会9月26日(土曜日。講師:朝岡聡)の告知はこちら→ <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

▼8月12日、ロッシーニと食べ物に関する本の出版記念会がペーザロで開催!▼

ドイツ・ロッシーニ協会事務局長レート・ミュラーとピアニストのアレッサンドロ・マランゴーニから8月5日と6日に届いたメールに基づく話です。ROFと直接関係ないのでROFのサイトには載りませんが、次のように開催されます。

期日: 8月12日、午前11時30分より(入場無料)

会場: パラッツォ・グラダリー(Palazzo Gradari)「ロッシーニの家」の右隣の建物です

これはロッシーニと食べ物に関する書籍の出版記念プレゼンテーションで、マランゴーニも著者の一人。レート・ミュラーによると、本のプレゼンテーションに合わせてレート・ミュラーが「ロッシーニのオペラの中の食べ物と飲み物(Cibo e le bevande nelle opera di Rossini)」と題した講演をするそうです。「ついでに『ロッシーニと料理』の著者である君の話を聞きたい」とレートのメールにありましたが、あいにく筆者のペーザロ入りはその日の夜。12日にペーザロにいる会員は、ぜひ覗いてみてください。

(↑まとめでの訂正: レート・ミュラーの講演は本のプレゼンテーションとは関係なく、ドイツ・ロッシーニ協会の主催で翌13日に別な会場で行われました)

なお、8月15日にマランゴーニとブルーノ・カニーノがペーザロのロッカ・コスタンツァでロッシーニ「老いの過ち」の演奏会を行います(19:30開演)。これはROFにおける「老いの過ち」チクルスの最終回ですが、筆者は20時から《幸せな間違い》を観劇するので行けません。なんでこういうかぶせ方をするのか!!

(↑まとめでの訂正: 当日は小雨が降り始めたため、直前に会場がテアトロ・スペリメンターレに変更されました)

▼8月16日、東京ユヴェントス・フィルハーモニーの演奏会に会員割引実施!▼

東京ユヴェントス・フィルハーモニー（旧：慶應ユース・オーケストラ）から日本ロッシェニ協会フェイスブックに、8月16日（日）演奏会の会員向け割引（チケット価格の半額で1,000円）のご案内をいただきました。協会フェイスブックはこちら→ <https://www.facebook.com/JapanRossini>（左下の投稿欄に掲載。抜けている期日と会場は次のとおり）

日時：2015年8月16日（日）13:30開場/14:00開演
場所：ティアラこうとう大ホール
チケット全席指定 2000円 ⇒1000円（優待価格）
案内文と申し込み方法を下記します。

日本ロッシェニ協会の皆様 2008年に高校生・大学生を中心として結成されたオーケストラ、東京ユヴェントス・フィルハーモニーの演奏会のご案内です。

東京ユヴェントス・フィルハーモニー第10回の記念演奏会では、前回より始動したベートーヴェン・ツィクルスの第2回目として『現代の古典』をテーマに演奏会を催します。ボッケリーニの『マドリードの夜の帰営ラッパ』はルチアーノ・ベリオが編曲したものを演奏し、気鋭・尾池亜美がソロを受け持つベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲のカデンツァは、シュニテケ版で演奏します。そして、東京ユヴェントス・フィルが満を持して挑むベートーヴェン：交響曲第7番においても、マルケヴィチ校訂版などを参考にし、『現代に息づく古典』をテーマに熱狂の世界に誘います。

Facebookをご覧になった方には、優待価格でチケット価格を半額とさせていただきます。皆様のご来場を何卒お待ち申し上げます。

《プログラム》ボッケリーニ（ベリオ編）：『マドリードの夜の帰営ラッパ』ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲ニ長調 Op.61（※）ベートーヴェン：交響曲第7番イ長調 Op.92 ヴァイオリン：尾池 亜美（※）指揮：坂入健司郎 演奏：東京ユヴェントス・フィルハーモニー

《チケット》全席指定 2000円 ⇒1000円（優待価格）

<チケット購入はこちら> 東京ユヴェントス・フィルハーモニー事務局 メールで、下記内容をご明記の上、以下の宛先にお送りください。宛先アドレス：tokyo.juventus.orchestra@gmail.com

<記載内容>

1.お名前 2.ご希望チケットの枚数 3.日本ロッシェニ協会での割引優待である旨

お忙しい中ですが、もしよろしければ足をお運びくださいませ。

東京ユヴェントス・フィルハーモニー公式HPはこちら→ <http://tokyojuventus.com/>

▼アッカデーミア・ロッシニアーナでフローレスが熱血指導！▼

昨年からペーザロのアッカデーミア・ロッシニアーナの一日講師を務めるフローレス。今年は去る7月15日、これを行いました。聴講したパルマ音楽院の学生・横前奈緒さんから聞いた話では、この日午後2時半から3時間の予定を過ぎてもフローレスが指導し続け、その姿をゼツダ先生も客席であたたかく見守っていたそうです。

時代が変わりましたね。ちなみに筆者が初めてペーザロを訪れたのは1989年、アッカデーミア・ロッシニアーナが誕生した年でした…あれから26年…でも学びに終わりはありません。

本日は、これにて失礼いたします。次号はROFレポート中心に、配信日未定でお届けします。

では皆さま、楽しいバカンスをお過ごしください。

(2015年8月10日 水谷彰良)



◆ガゼッタ第109号◆

ガゼッタ第109号をお届けします。

本号は、「2015年ROF（ロッシェニ・オペラ・フェスティバル）レポート（1）」をお届けします。

次回例会9月26日（土曜日。講師：朝岡聡）の告知はこちら→ <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

▼2015年ROF（ロッシェニ・オペラ・フェスティバル）レポート（1）▼

やってきましたペーザロの夏が…蚊取り線香の商業パクリですが、マニアックなロッシェニ愛好家に恒例の「夏」、それがROF（ロッシェニ・オペラ・フェスティバル）です。

今年は8月12日に日本を立ち、同日夜ペーザロ入りの予定でしたが、出発時のフライトが1時間45分遅れて乗り継ぎできず、フランクフルト空港で次のフライトを6時間待つはめに。ボローニャからタクシーでペーザロのホテルに着いたのも午前1時半！…タクシー代250ユーロ（約3万4千円）の出費で散々な出だしです。

それはともあれ、翌13日から20日までの8日間に、ROFでオペラ10回（《泥棒かささぎ》と《新聞》各3回、《幸せな間違い》と《ランスへの旅》各2回）、コンサート4回（《グローリア・ミサ》2回、アマルとペレチャツコのリサイタル）、ウルバニア日帰りツアーに講演会各1回と、合計16の催しを観ました。

いまはまだザルツブルクにいますので、2回に分けて簡略な報告をさせていただきます。

◎《泥棒かささぎ》（アドリアティック・アリーナ。8月13、16、19日観劇）

2007年8月ROFのミキエレット演出再演。キャストはニネッタの父親役のエスポージトを除いて総入れ替えですが、狂言回しの少女（=かささぎ）は8年前と同じサンディア・ナガラジャです（インド人のダンサー）。演奏と主な配役は次のとおり。

演出：ダミアーノ・ミキエレット（Damiano Michieletto）
ドナート・レンツェッティ（Donato Renzetti）指揮、ボローニャ歌劇場〔市立劇場〕管弦楽団&合唱団
ファブリーツィオ・ヴィングラディート：シモーネ・アルベルギーニ（Simone Alberghini）
ルチーア：テレザ・イエルヴォリーノ（Teresa Iervolino）
ジャンネット：ルネ・バルベラ（René Barbera）
ニネッタ：ニーノ・マチャイゼ（Nino Machaidze）
フェルナンド・ヴィッラベッラ：アレックス・エスポージト（Alex Esposito）
ゴットアルド〔代官〕：マルコ・ミミカ（Marko Mimica）
ピッポ：レーナ・ベルキナ（Lena Belkina）
イザッコ：マッテオ・マッキオーニ（Matteo Macchioni）……以下省略

8年前の上演がDVDになっていますので、演出に関するコメントを省略して今回の印象を記しますと…

前回同様に素晴らしいのが、ヴェリズモ風に激しく演じるアレックス・エスポージト。彼だけ今回のキャストに残ったのも頷けます。最終日（19日）の第2幕では、水浸しの床をエスポージトが這いずりまわる際に跳ね飛ばした水しぶきがピットに届くアクシデントもありました（楽器に水のかかったチェリストが、楽器を抱えて出ていきました）。ヒロインのニネッタを歌うニーノ・マチャイゼはベルカント的な味わいが乏しく、観劇した初日（13日）に不満をおぼえましたが、聴くうちに慣れ、最終日はドラマティックな発声歌唱が好印象に転じました。



代官役のバス、マルコ・ミミカも特筆に値します。昨年の若者公演《ランスへの旅》のシドニー卿を歌ったクローチア人バスで、歌も演技も完成度が高く、今後もROFで活躍することでしょう。ジャンネット役のテノールはアメリカ人ルネ・バルベラ。2011年モスクワ開催プラシド・ドミンゴ・オペラリア・コンクールで優勝した新人で、今回がROFデビューですが、出てきた瞬間なぜか「顔が三波伸介（初代）みたいだな〜」と思いました。ちょっと癖のある声ですがティンブロ（声質）は良く、アクトも立派（とくに最終日）。

ルチーア役のテレザ・イエルヴォリーノは名前に聞き覚えがあると思ったら、昨年5月のゼツダ指揮、東京フィルハーモニー交響楽団演奏会の《ジョヴァンナ・ダルコ》を歌っていました！これが今年26歳とは思えぬ堂々たる声と歌唱です。ファブリーツィオ・ヴィングラディート役のシモーネ・アルベルギーニも、味のある演技と表情で好演。残念なのがピッポ役のレーナ・ベルキナ。声量が乏しいのは昨年演じた《パルミラのアウレリアーノ》アルサーチェも同様で、素質はあっても使うのが早すぎるのでは？

指揮のドナート・レンツェッティは、現代のロッシーニ演奏の洗練やスピード感とは異質の「昔の名前で出ています」みたいな指揮者で、これは《グローリア・ミサ》でも歴然としていました。とはいえ今回の《泥棒かささぎ》は、8年前の上演以上に感銘深く、説得力のある公演となりました（平土間の1、2、3列で観劇）。

◎《新聞》（ロッシーニ劇場。8月14、17、20日観劇）

今回の3演目で唯一の新演出がこの《新聞（ラ・ガゼッタ）》。ROFでは2001年と05年に上演したダリオ・フォ演出のキッチュな舞台が人気を博したので、それを超える演出ができるのだろうか…と不安を抱いたのも事実。でもそれは杞憂に終わりました。演奏と主な配役は次のとおり。

演出：マルコ・カルニティ（Marco Carniti）
エンリケ・マッツォーラ（Enrique Mazzola）指揮、ボローニャ歌劇場〔市立劇場〕管弦楽団&合唱団
ドン・ポンポーニオ：ニコラ・アライモ（Nicola Alaimo）
リゼッタ：ハスミク・トロシヤン（Hasmik Torosyan）
フィリップポ：ヴィート・プリアンテ（Vito Priante）
ドラリーチェ：ラッファエッラ・ルピナッチ（Raffaella Lupinacci）
アンセルモ：ダリオ・シクミリ（Dario Shikhmiri）
アルベルト：マキシム・ミロノフ（Maxim Mironov）
ラ・ローゼ夫人：ホセ・マリア・ロ・モナコ（José Maria Lo Monaco）
トンマジーノ：エルネスト・ラーマ（Ernesto Lama）……以下省略

事前の予想をこれほど見事に覆された上演はありません。カルニティ演出の舞台と歌手全員に加え、喜劇の助演がとてつもなく素晴らしく、手放して絶賛するしかないのです。舞台は背後と両サイドをカーテンで囲み、これが照明でさまざまな色彩に変化します。装置らしい装置は、複数に分けてテーブルにも使える長い台、椅子や移動できる階段などが折々に使われるだけ。

でも、ドン・ボンポーニオ役のニコラ・アライモが登場すると、舞台は笑いに包まれます。おデブなアライモにまわりつく下男トンマジーノ（トンマジと呼ばれます）を演じるエルネスト・ラーマが、ストレーレル演出のゴールドーニ『二人の主人を一度に持つと』でアルレッキーノを演じたフェルッチョ・ソレーリさながらの名優なのです。ラーマはナポリ生まれ、アライモはパレルモ生まれ。共に南部出身ですから、このオペラのナポリ語の妙味も遺憾なく発揮されます。

リゼッタ役のハスミク・トロシャンは、昨年（2014年）の若者公演《ランスへの旅》のコリンナを歌ったアルメニア人。若く健康的な色気を振りまき、歌もしり上がりに良くなりました（最終日が一番好印象）。それを上回ったのがドラリーチェ役のラッファエッラ・ルピナッチ。2012年《ランスへの旅》のメリベアで、翌2013年《アルジェのイタリア女》ズルマ、14年《パルミラのアウレリアーノ》プブリアと、ROFで着実に成長しています。

アルベルト役は9年ぶりのROF登場となるマキシム・ミロノフ。9年前の《アルジェのイタリア女》どころか2001年の《ランスへの旅》と風貌や印象がまったく変わっていないのが驚きですが、声と歌唱、演技にも余裕があります（個人的には伸び悩みの感もあるのですが…）。その意味では、フィリッポ役のヴィート・ブリアンテが実に見事なバリトンで、これがROFデビューとは驚きの逸材です。ナポリ生まれのベルカント歌手でアジリタも抜群ですから、今後ROFに引っ張りだことなるでしょう。



指揮者マツォーラも巧みにオケを牽引し、音楽の魅力を引き出します。なによりアライモとラーマのコンビが最高で、アンサンブルは歌手がそれぞれの場所で突っ立って歌っても、ラーマが歌手の間を駆け回って笑いを誘うので、音楽的な完璧さを保ちつつ舞台に躍動感が漲っています。第2幕で白鳥の湖を男4人で踊るところも含め、これほど楽しい舞台は稀です。筆者は最初の2回がパルコの1階と2階で観劇しましたが、最終日は平土間の最前列だったので初めから最後まで笑っぱなしでした。

◎ 《幸せな間違い》（ロッシーニ劇場。8月15、18日観劇）

今回の3演目にオペラ・セーリアはありませんが、1幕のファルサ《幸せな間違い》は《泥棒かささぎ》と同様に、救出劇や感傷劇のオペラ・セミセーリアに属します。演奏と主な配役は次のとおり。

演出：グラハム [グレアム]・ヴィック (Graham Vick)
デニス・ヴラセンコ (Denis Vlasenko) 指揮、G.ロッシーニ交響楽団
イザベッラ・マリアンジェラ・シチーリア (Mariangela Sicilia)
ベルトラント：ヴァシリス・カヴァヤス (Vassilis Kavayas)
オルモンド：ジュリオ・マストロトタロ (Giulio Mastrototaro)
タラボット：カルロ・レポーレ (Carlo Lepore)
バトーネ：ダヴィデ・ルチアーノ (Davide Luciano)

ヴィック演出《幸せな間違い》は1994年の舞台の再演に当たります。筆者は前回も見ましたが、そのときは作品や演出に対する無知無理解もあって「つまらない」と感じました。ところが21年ぶりに見て、その素晴らしさに感銘を受けました。鉱山の入口のある風景がこれ以上ないほどに写實的に再現され、時の移ろいも巧みに視覚化されていたからです。21年前は単に後半が薄暗く、背後に少しずつ動く客船の模型もあざとく感じたのですが…《泥棒かささぎ》もそうですが、過去に見たのと現在見るのでは印象が違います。



キャストは1964年生まれのカルロ・レポーレを除いてみな若手。当然と言うべきか、レポーレのタラボットが実に人間味あふれる表情と歌唱で絶品。ヒロインのイザベッラを歌うマリアンジェラ・シチーリアは今年29歳で、2012年の若者公演《ランスへの旅》のコリンナです。実年齢よりも上に見える顔つきで、表情と演技は良いのですが歌唱はまだまだかな、と感じます。

ベルトラント役のヴァシリス・カヴァヤスは同じ29歳のギリシア人テノールで、翌年（2013年）の《ランスへの旅》リーベンスコフです。背が高く、見栄えも良いのですが、ちょっと変な声とあってカーテンコールでブーが飛びました。他の歌手ではバトーネ役のダヴィデ・ルチアーノが抜群に良く、レポーレに次ぐ喝采を浴びました。彼は2012年のドン・プロフォンドで、翌年《アルジェのイタリア女》でアリ [ハリー] を歌った逸材です。こうしてみると、劇の要のタラボット役以外の大半が過去3年間のアカデミア・ロッシニアーナの出身と判ります（オルモンド役のマストロトタロは今回がROFデビュー）。

指揮はデニス・ヴラセンコ。2008年の若者公演《ランスへの旅》を指揮して評価されたロシア人で、14年藤原

歌劇団《オーリー伯爵》をアッレマンディに代わって指揮しています。筆者はとても良いと思いましたが、ロッシーニ交響楽団の水準がイマイチで、18日のカーテンコールではブーが聞こえました。確かに若い歌手には不足もありましたが、それを補う見事な舞台に満足しました。

以上がザルツブルクで書いたレポートです。続きは帰国後に執筆&配信させていただきます。

(2015年8月25日 水谷彰良)



ガゼッタ第110号をお届けします。

本号は、「2015年 ROF (ロッシーニ・オペラ・フェスティバル) レポート (2)」、「2016年 ROF の演目と出演者の速報!」をお届けします。分量の関係で二つに分け、時間差で「第110号」と「第110号の続き」を順次配信します。

次回例会9月26日(土曜日。講師:朝岡聡)の告知はこちら→ <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

なお、7月22日と24日に掲載した本年のROFの演目の《幸せな間違い》《グローリア・ミサ》《オルフェオの死によせるアルモニアの涙》《ディドーネの死》の各作品解説を、改訂版と差し替えました(8月30日アップ)。

▼2015年 ROF (ロッシーニ・オペラ・フェスティバル) レポート (2) ▼

◎若者公演《ランスへの旅》(ロッシーニ劇場。8月14、17日観劇)

恒例のアカデーミア・ロッシーニアーナ(ロッシーニ・アカデミー)19人の研修生による上演。演出はいつものエミリオ・サージ。昨年「小旅行 Viaggetto」と題して6~10歳の子供たちを参加させる催しと連動し、若者公演でもフィナーレに子供たちが王冠をつけて手をつないで平土間の通路を歩くようになりました。筆者は14・17日の両日を見ましたが、17日は十四重唱で会場を後にしました(マチェラータから来た友人と昼食のため)。演奏と配役は次のとおり。

マヌエル・ロペス＝ゴメス Manuel López-Gómez 指揮 フィラルモーニカ・ジョアキーノ・ロッシーニ (Filarmonica Gioachino Rossini)

コリンナ: Giuseppina Bridelli (14日)、Federica Di Trapani (17日)

メリベア侯爵夫人: Cecilia Molinari (14日)、Shirin Eskandani (17日)

フォルヴィル伯爵夫人: Salome Jicia (14日)、長町香里 [Kaori Nagamachi] (17日)

コルテーゼ夫人: Ruth Iniesta (14日)、Leslie Visco (17日)

騎士ベルフィオーレ: Sunnyboy Dladla

リーベンスコフ伯爵: Xiang Xu (14日)、Rubén Pérez Rodríguez (17日)

シドニー卿: Sundet Baigozhin (14日)、Alessandro Abis (17日)

ドン・プロフォンド: Pablo Ruiz

トロンボク男爵: Vincenzo Nizzardo

ドン・アルヴァーロ/アントーニオ: Carlo Checchi

ドン・プルデンツィオ: Shi Zong

ドン・ルイジーノ/ゼフィリーノ/ジェルソミーノ: Dangelo Fernando Díaz

デリア: Carmen Buendía

マッダレーナ: Shirin Eskandani (14日)、Cecilia Molinari (17日)

モデスティーナ: 長町香里 [Kaori Nagamachi] (14日)、Salome Jicia (17日)



今年は例年になく良いメンバーがいました。指揮者マヌエル・ロペス＝ゴメスはベネズエラ人で、エル・システマの教育で8歳からヴァイオリンを学び、シモン・ポリバル・ユース・オーケストラのメンバーとして来日経験があるそうです。ドゥダメルの下でオペラ指揮者として研鑽を積み、なかなかの逸材です。

歌手で良かったのが14日のコリンナ Giuseppina Bridelli、騎士ベルフィオーレの Sunnyboy Dladla(テノール、南アフリカ人)、14日のシドニー卿 Sundet Baigozhin (バス、カザフスタン人…日本語も少し話せます!)。即戦力との印象です。ロッシーニ向きではないけれど、14日のコルテーゼ夫人 Ruth Iniesta (ソプラノ、スペイン人)も出色でした。

毎年そうですが、優れた歌手とそうでない歌手の落差が大きく、なんでこの程度で選ばれたのかと不審に思える人も三分の一ほどいました…この問題は、いずれきちんと書くことにしましょう。

14日の公演後、日本ロッシーニ協会の役員3人(朝岡・金井・私)でゼッダ先生の別宅へお招きにあずかりました(会員の原さんもお誘いしてご一緒しました)。この日は午後5時から講演会(後述)が予告され、その日の新聞にも載っていましたが、19日に変更されたと教えられ、ゆっくり昼食をいただきました。

◎《グローリア・ミサ》ほか（アドリアティック・アリーナ。8月13、18日鑑賞）

今年のROFの目玉の一つがファン・ディエゴ・フローレスの出演する《グローリア・ミサ》ほかの演奏会です。会場は当初予定されたロッシェニ劇場からアドリアティック・アリーナ、指揮者も先月アキレス腱断裂の怪我をしたロベルト・アップードからドナート・レンツェッティに変更されました。

曲目は《グローリア・ミサ》《オルフェオの死によせるアルモニアの涙》《ディドネの死》の順に予告されましたが、カンタータの順序を変えて演奏したのはフローレスのソロで締め括るための措置で、《グローリア・ミサ》のテノール I と II のアリアもフローレスが一人で歌うなど「フローレス祭り」の様相を呈しました。

でも珍しく緊張していたみたいで、初日（13日）は「クリステ・エレイソン」の後も立ったまま…歌うところがないのに（笑）…2日目（18日）もアリアの前に袖に引っ込むなど、いつもと違いました。でも彼の熱唱のおかげでつまらない曲が名曲に聴こえました。《ディドネの死》のソリスト、ジェシカ・プラットは2日目の方が良く、フローレスに次ぐ喝采を浴びました。

残念なのは、指揮者ドナート・レンツェッティのテンポが間延びしていること。「いまはそういう解釈じゃないんだけどなあ…ゼツダ先生が指揮したらどれほど良かったか！」と思いつつ見ていました。



◎ベルカント・コンサート (1) キアラ・アマルのリサイタル（アウディトリウム・ペドロッチェ。8月16日 17:00～）

ベルカント・コンサートは三つ行われましたが、21日のニコラ・アライモは聴けませんでした。最初はキアラ・アマル（Chiara Amarù）…可愛いので以下、アマルちゃんと書きます…のリサイタル（ピアノ伴奏：カルメン・サントーロ Carmen Santoro）。

実はいま筆者一押しのロッシェニ歌手がアマルちゃんです。1984年パレルモ生まれだから今年31歳ですが、2011年のROFデビュー《エジプトのモゼ》アメノフィ役からその初々しくも輝かしい声に惚れました。昨年の《セビリヤの理髪師》ロジーナも素敵でしたが、今年のリサイタルではそれまで知りえなかった彼女の魅力を堪能しました。

曲目は、マスネの「スペインの夜」「アンダルシアの歌」「セビリヤーナ」、トマ《ミニョン》から「きみ知るや南の国」、マイアベア《ユグノー教徒》ユルバンのエールに続いてロッシェニの作品…《アルジェのイタリア女》イザベラのカヴァティーナ、《湖の女》マルコムのアリアほかがありました。

マスネとトマに濃厚なエロティシズムを漂わせ、マイアベアで洒落な歌の表現を聴かせます。ロッシェニの超絶華麗なアジリタにも驚きました。とりわけアンコールで歌った《ラ・チェネレントラ》ロンド・フィナーレは、「バルトリ以上に見事に歌えます」とアピールするかのよう猛烈なスピードと高度なヴァリアツィオーネを駆使し、観客を熱狂させました。

もう言葉にできない素晴らしさ……この日、私はアマルちゃんの熱烈なファンになりました。いや私だけではなく、その場に居合わせた誰もがアマルちゃんに恋したはずで。

Programma
Jules Massenet Nuit d'Espagne Chanson andalouse Nocturne
Ambroise Thomas Mignon Aria di Mignon «Comme tu le pays»
Giacomo Meyerbeer Les Huguenots Aria di Urbain «Non, non, non, vous n'avais jamais»
Gioacchino Rossini L'Italienne in Algeri Aria di Isabella «Cruda corte»
Gaetano Donizetti La Conquistada, romanza napoletana
Gioacchino Rossini La donna del lago Nocturno e Cavatina di Malcolm «Mura belli... Elena! Oh tu, che chiami»
Saints Matheos L. L'Alto
Consuetudine Spagnuola

◎ベルカント・コンサート (2) オルガ・ペレチャツコのリサイタル（アウディトリウム・ペドロッチェ。8月19日 17:00～）

ベルカント・コンサートの二つ目は大人気のオルガ・ペレチャツコ（Olga Peretyatko）のリサイタル（ピアノ伴奏：ジュリオ・ザッパ Giulio Zappa）。曲目は前半を祖国ロシアの音楽…グリーンカ《ルスランとリュドミラ》のカヴァティーナ、リムスキー＝コルサコフの太陽の賛歌など4曲、ラフマニノフ「ヴォカリーズ」など4曲…でまとめ、後半にロッシェニ《ランスへの旅》コリンナの即興歌と《セミラーミデ》の「美しい光が」を歌いました。

ロシア人の観客の圧倒的人気と裏腹に、筆者はペレチャツコの声と発声、歌のスタイルがイマイチ好きではありません。この日良かったのもラフマニノフのヴィカリーズなどあまり荒が目立たない楽曲で、コリンナの即興歌は繰り返し部分で歌が行方不明になりました。とはいえ、この日歌われたヴァリアツィオーネは筆者未経験の特殊かつ大胆な歌い替えだったので、その点は大いに感心しました。誰がこんなすごいヴァリアツィオーネを作ったのでしょうか…

休憩を含めて1時間と告知されながら、アンコールの3曲目ですすでに1時間半を過ぎています。続いてアドリアティック・アリーナで《泥棒かささぎ》を観るこちらは気が気でないのに、次から次へ花束を受け取ったペレチャツコには演奏を終える気配がありません…オイオイ空気読めよ、と思いつつ退散しましたが、その後さらに2曲アンコールを歌ったそうです。

Programma
Michail Glinka Ruslan e Ludmilla Cavatina di Ludmilla «Grustno mne, roditel dorogoj»
Nikolaj Rimsky-Korsakov Zolotoj petushok, Inno al sole della Regina di Schemakhan «Zvonce zhavoronka pjen'je, aria da camera» «Plenishis' rozaj, solovej, romanza orientale»
Snegurochka Aria di Snegurochka «S podruzhkami po jagody chodit»
Sergej Rachmaninov Siren Vocalise «Zdes' charosha» «Ne poi krasavica»
Gioacchino Rossini Il viaggio a Reims Strofa d'improvviso (Corinna) «All'ombra amena del Giglio d'or»
Semiramide Aria di Semiramide «Bel raggio lusinhier»

以下、「第110号の続き」をご覧ください。

ガゼッタ第 110 号の続きです。

◎講演会「ロッシーニと聖なるもの (Rossini e il sacro)」(サーラ・デッラ・レプブリカ。8月19日 11:30～)

これは《グローリア・ミサ》《スタバト・マーテル》と関連する講演会で、14日17時からと発表されていたのに当日19日に変更されました(14日の新聞にも誤報が載りました!)。司会は現在のロッシーニ全集出版最高責任者イラーリア・ナリーチで、指揮者ドナート・レンツェッティが《グローリア・ミサ》、ミケーレ・マリオッティが《スタバト・マーテル》の特色を順次話しました。

とはいえレンツェッティはロベルト・アッパードの代役でロッシーニ作品の専門家でなく、「間違ったら指摘してね。10日前から準備を始めただけだから」「マリオッティのことは彼が子供の頃から知ってるよ。ロッシーニのことは彼の方が詳しいんだ」と言う始末。マリオッティも途中で話がヴェルディのカデンツァに逸れ、「あれ、ぼくは何の話をしてたっけ…」と言って客席から「ロッシーニの《スタバト》のカデンツァ!」と返されました。なんと締めりのないグズグズの講演会で、筆者は50分ほどで堪忍袋の緒が切れて退席しました。

◎ウルバニア日帰りバスツアー参加(8月20日)

ROFとは関係ありませんが、8月20日に現地の Esatour が行ったウルバニア日帰りバスツアーに参加しました。当初8月13、16、20日の3回予定でしたが、催行は20日のみ。その20日も定員50人のところ30人ちょっとしか集まらず、半数近くが日本人でした(筆者同行の郵船トラベル・ツアーの参加で実施に至ったとのこと)。

ウルバニアはペーザロから約40キロ、住民約7000人の小都。最後の偉大なカストラート、ジローラモ・クレシェンティーニの出身地で、350席の小さなブラマンテ劇場があります。ツアーはブラマンテ劇場でソプラノとハーブによるロッシーニとクレシェンティーニの作品演奏を聴き、《ギョーム・テル》序曲の間に即興で絵を描くアクション・ペインティングを見て、劇場最上階でbuffet・ランチをとりました。食後の陶器の工房見学は余計でしたが、とても楽しいひとときを過ごすことができました。



バスツアーから戻って夜に《新聞》最終日を観劇し、筆者9日間のペーザロ滞在が終わりました。

◎オマケ：ザルツブルク音楽祭の《トリドのイフィジェニー》と《ばらの騎士》観劇(8月22&23日観劇)

旅の後半は郵船トラベル・ツアーの同行講師を務めて21日にザルツブルクに飛び、バルトリ主演のグルック《トリドのイフィジェニー [タウリスのイフィゲニア]》をモーツァルト劇場、R.シュトラウス《ばらの騎士》を祝祭大劇場で観劇しました(22日と23日)。

《トリドのイフィジェニー》は今年のザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭の再演です。演出：モーシュ・ライザー & パトリス・コリエ、ディエゴ・ファソリス指揮イ・パロッキスティ、イフィジェニー：チェチーリア・バルトリ、ピラード：ロランド・ヴィラゾン [ピリャソン]、オレスト：クリストファー・マルトマン、トアス：ミヒャエル・クラウス、ディアース：レベカ・オルヴェラ [オルベラ]。

バルトリのプロダクションだから最高水準で当然。ピラード役のヴィラゾン、オレスト役のマルトマンに加えてトアス役クラウスの立派な声に驚きました。バルトリは共演者に負けじと声を張り、高音を叫びがちでしたが、声のパワーでは男性3人に適いません。伴奏はファソリス指揮の古楽オーケで、打楽器群も充実していました。

ライザー/コリエの演出はいつものように20世紀への移し替えて、今回は処刑されようとするオレストを演じるマルトマンを全裸にさせました。股間を両手で隠しただけなので「ポロリ」を心配しましたが、筋肉質の美しい肉体に見惚れました。最後にディアースが金粉ショーみたいな姿で登場し、ユラユラ動いたのは余計でしたね。



《ばらの騎士》は昨年ザルツブルク音楽祭の再演に当たり、NHK-BSでも放送されたのでご覧の方も多いでしょう。演出：ハリー・クプファー、フランツ・ヴェルザー＝メスト指揮ヴィーン・フィル、元帥夫人：クラッシミラ・スタヤノヴァ、オクタヴィアン：ソフィー・コッホ、オックス男爵：ギュンター・グロイスベック。ゾフィー役だけ南アフリカ出身の新人ゴルダ・シュルツに変わりました。

この上演は歌手たちの健闘とヴェルザー＝メスト指揮ヴィーン・フィルの美しい音楽に加え、プロジェクション・マッピングを応用した背景の素晴らしさに圧倒されました。まさに壮観! その迫力とリアル感を生で見ないと判らないと実感しました。今後はCGクリエーターもオペラの制作に不可欠となりますね。



かくして2週間に及んだ今年のペーザロ&ザルツブルクの旅が終わりました(25日帰国)。ROFも例年になく充

実した内容で、芸術監督がゼツダ先生からエルネスト・パラシオに代わる来年も大いに期待できます。本号の最後に、2016年ROFの演目と出演者にふれておきましょう。

▼2016年ROFの演目と出演者の速報！▼

会期：2016年8月8～20日

《湖の女》…ダミアノ・ミキエレットの新演出、指揮はミケーレ・マリオッティ。フローレスの出演決定！

《イタリアのトルコ人》…ダヴィデ・リヴェルモレの新演出、指揮はスペランツァ・スカップッチ。ペレチェツコの出演決定！

《バビロニアのチーロ》…2012年リヴェルモレ演出の再演。指揮はヤデル・ビニャーミニ。

会期、演出と指揮者はROFのサイトで正式発表されています。↓

<http://www.rossinioperafestival.it/?IDC=506&ID=684>

フローレスとペレチャツコの出演は、ROF友の会の責任者ドノバンさんのメール（8月25日付）に基づきます。《イタリアのトルコ人》を指揮するスペランツァ・スカップッチ（**Speranza Scappucci**）は近年脚光を浴びる女性指揮者で、ローマのサンタ・チェチーリア音楽院とジュリアード音楽院で学び、メトロポリタン歌劇場でレヴァイン、ザルツブルクとローマでムーティのアシスタントを務めました。《バビロニアのチーロ》の指揮者ヤデル・ビニャーミニ（**Jader Bignamini**）は1976年クレマ生まれ。クラリネット奏者から指揮に転じ、ロッシーニ指揮者としての評価は未知数です（ヴェルディやプッチーニを振っています）。

ともあれ来年のROFは、今年以上に盛り上がることでしょう。ROFに終わりなし！

本日は、これにて失礼いたします。時差ボケの中での散漫レポートですみません。「ロッシーニの家」の改装と展示の変更については次号で明らかにします。

（2015年9月5日 水谷彰良）

